

19世紀前半アメリカにおける衣服産業の発展

— ニューヨークの既製服産業を事例として —

長崎 雅樹*

はじめに

本稿の課題は、19世紀前半のアメリカの衣服産業の発展過程をニューヨークの既製服産業という事例を通じて確認し、同時期の衣服産業の発展という事実がアメリカにおいていかなる意味を持つものであったかを確認することである。

本稿で対象とする19世紀前半の衣服産業は、既製服産業という形をとって発展した。このことは標準化された製品の生産と販売という面でアメリカに特徴的な大量生産体制と通じる面がある。このために大量生産体制との関連でまず本稿の課題をみてみたい。大量生産体制が本格的に発展したのは19世紀後半のことであるので、まずはこの時期における大量生産体制の特徴とその中で衣服産業のあり方に確認し、その後本稿で対象とする19世紀前半についてみる。

19世紀後半のアメリカの大量生産は、鉄鋼・石油などの生産財と共にミシン・農業機械・タバコ・食品などの消費財でも行われているという特徴があった。これらは連続工程機械や交換性技術を用いる資本集約的なやり方で大量生産が行われ、消費財に限ってみると生産された製品は標準化された既製品として同時期に運輸・通信の発展によって出現した全国市場に向けて

販売されていた。そして、この市場は標準化された製品を受け入れるという性向をもった大衆消費市場であった。この一方で本稿が対象とする衣服産業では、先述のような製品とは異なり労働集約的なやり方であったがやはり既製服の大量生産が行われており、生産された既製服も全国市場にむけて販売されていた¹⁾。

次に本稿で対象とする19世紀前半についてみると、この時期に機械を用いて工場生産を行っていたのは繊維産業と兵器産業に限られていた。繊維産業では既に紡績機や力織機を用いて50人以上を雇用する工場での生産が行われていた。また兵器産業では交換性技術を用いた「アメリカ的生産方式」とよばれる19世紀後半につながるような方法を用いて生産を行っていた。この一方で同時期の衣服産業では機械を導入することはなかったが、既に自家生産と注文生産という段階を脱して前貸し制度を用いて既製服生産を行っており、生産された既製服は19世紀後半と比べると規模は小さいがやはり全国市場に向けて販売されていた²⁾。

¹⁾19世紀後半の大量生産体制については、アルフレッド・D・チャンドラー Jr., 鳥羽欽一郎・小林袈裟治訳『経営者の時代—アメリカ産業における近代企業の成立』上, 東洋経済新報社, 1979年, 第8章。アメリカ市場の特徴については、鳥羽欽一郎『企業発展の史的研究—アメリカにおける企業者活動と経営管理』ダイヤモンド社, 1970年, 75-78頁。

²⁾チャンドラー『経営者の時代』上, 101-108, 127-131頁。また本稿で対象とするのは男子既製服産業の発展過程である。女子既製服の生産が本格化するのには19世紀後半からであった。

*長崎 雅樹 (Masaki NAGASAKI) : 東京大学大学院経済学研究科博士課程。「19世紀前半フィラデルフィアにおける消費財産業と小売業の発展」(東京大学経済学研究会『経済学研究』第48号, 2006年3月)。
mk--nagasaki@nifty.ne.jp

19世紀前半のアメリカについてのわが国の経済史研究は、同時期が産業革命の時期であったことを反映して、ニューイングランドの繊維工業やペンシルバニア州の鉄工業に関するものが多い。しかし、本稿で対象とする衣服産業については労働運動に関連して簡単に述べられるだけのことが多く、その生産工程や市場に関するものはあまり存在していない³⁾。

以上のような点をふまえて、本稿では次のような観点から19世紀前半の衣服産業の発展過程に注目する。即ち19世紀前半のアメリカは繊維産業や兵器産業が発展した時期であったが、これと並行する形で衣服産業も発展をみせており、それは既製品生産と製品の全国的な大衆消費市場に向けての販売という19世紀後半のアメリカの大量生産体制における特徴と共通する特徴を持っていたのではないかということである。そして、その要因・生産工程・市場への販売過程を確認することを本稿での具体的な課題とした。

本稿において、ニューヨークの既製服産業を事例として取り上げる理由は以下の通りである。19世紀前半のアメリカにおいては、既製服生産はニューヨーク、フィラデルフィア、ボストン、シンシナティなど多くの都市において開始された。これらの都市の既製服生産に関しては、前貸し制度を用いていたこと、生産された既製服が全国市場に向けて販売されていたことが共通していた。これらの中でもニューヨークは多くの条件に恵まれていたために既製服生産の中心地となっていた。このために、この都市の既製服産業の発展過程は事例として取り上げるのに

ふさわしいと思われる。

本稿の構成は以下の通りである。まず第Ⅰ節において、前提として既製服生産が開始される以前のアメリカにおける衣服生産とその当時の服装を確認する。第Ⅱ節においては、既製服生産が拡大した要因と過程を確認した後に既製服生産の中心地としてのニューヨークの位置を確認する。第Ⅲ節においては、既製服の生産工程について確認する。第Ⅳ節においては、既製服の全国市場への販売過程を確認した後、既製服がどの程度まで普及したかをみる。最後に以上の事実から明らかになったことを通じて、19世紀前半における衣服産業の発展という事実が同時期のアメリカにおいていかなる意味を持つものであったかを確認する。

I 1820年以前の衣服生産

はじめに前提として既製服生産が始まる以前の衣服生産を確認する。1820年代に既製服生産が本格化するまで、アメリカでの衣服生産は仕立職人による注文生産か自家生産によって行われていた。19世紀初頭においては最高級かつ最も優美な衣服は、長い徒弟修業を積んだ仕立職人によって注文生産されていた。しかし、このやり方で生産される衣服は非常に高価であったために、限られた富裕層しか仕立職人に注文生産を依頼することができなかった⁴⁾。このために他の大部分の衣服は自家生産されていた。例えば1810年に財務長官のアルバート・ギャラティンは「都市の居住者を除くと、アメリカの住民によって着用される衣服の3分の2以上は家庭で生産されたものである」と推定している⁵⁾。このような状況は1820年代に既製服生産が本格化するまで続いていた。

³⁾ 産業革命に関するものとして、楠井敏朗『アメリカ資本主義と産業革命』弘文堂、1970年；豊原治郎『アメリカ産業革命史序説』未来社、1962年。労働運動に関しては、津田真澄『アメリカ労働運動史』総合労働研究所、1972年。兵器産業については、中川敬一郎「ニューイングランド産業革命と大量生産体制の発展－(1)(2)」東京大学経済学会『経済学論集』第29巻第4号-第30巻第1号、1964年がある。

⁴⁾ Edith Abbott, *Women in Industry: A Study in American Economic History*, New York, 1909, p. 217.

⁵⁾ *The New American State Papers, Manufactures*, Vol. 1, Wilmington, Del., 1972, p. 126.

まず仕立職人について確認すると、彼らは当初は村から村、家庭から家庭へと道具を持参して移動し、顧客の用意した材料を用いて仕事を行っていた。やがて村が町へと成長すると町に定住して仕事を行うようになった⁶⁾。ニューヨークにおいても19世紀初頭にはマンハッタンの南部に既に多数の仕立職人が存在しており、主に近隣の住民を顧客として注文生産を行っていた。彼らは19世紀後半のような南部・西部向けの卸売生産は行っておらず、仕事に関しては親方職人が妻と徒弟と1人またはそれ以上の雇われ職人の助けを借りて行うという小規模なものであった⁷⁾。彼らの行う衣服のデザイン、裁断、フィティングなどは熟練を要する仕事であり、道具は寸法を測るための細長い紙片や羊皮紙、チョーク、針、アイロンなど数少なかったが、これらを正しく扱えるようになるためには長い徒弟期間が必要とされた。この仕立職人の成功は採寸・裁断・アイロンがけなどの技術だけでなく、技巧的な仕上げができるかにもかかっていた⁸⁾。

この一方で衣服の自家生産を行うためには技術はあまり必要とされていなかった。全てのアメリカ人女性は、家事のひとつとして簡単な裁縫を知っていることを期待されていた。しかし、彼女達は徒弟修業を積んだわけではないために、その裁縫・裁断・アイロンがけの技術は訓練を欠いたものであった。例えば、主婦は技巧的な縫い合わせ方をひとつは知っていたかもしれないが、訓練を受けた仕立職人のように多数は知らなかった。実際、家庭における衣服生産は多くの家事の中のひとつにすぎず、その生産には

あまり多くの時間はかけられていなかった⁹⁾。

また注文生産を依頼できる上層階級と自家生産を行っていた他の階級では、相互に着用する衣服の素材や種類も異なっていた。まず衣服の素材に関して、18世紀のアメリカにおいて織物の入手は非常に困難であった¹⁰⁾。上層階級は高価な輸入織物を使用することができたが、他の階級の衣服はしばしばホームスパンの粗悪な織物でできていた。そして、それらの衣服には富裕層が愛好した刺繍を施したボタンホールやひだ飾りや金銀糸入りのモールはあしらわれていなかった。色彩に関しては、富裕層が明るい緋色や黄色を好んだのに対して、他の階級の衣服は一般的に単調な色彩であった。また彼らの衣服は、富裕層のものよりもデザインが質素でゆったりし、より機能的であった。例えば、紳士達は流行のロング・コートやぴったりにしたニー・ブリーチを着用していたのに対して、他の階級はジャケットや労働のために実用的で快適なズボンをはいていた。彼らがフォーマル・スーツをもつことはまれであり、仕立のよいフォーマル・スーツは2世代またはそれ以上もつことが期待されていた。このために、フォーマル・スーツは日曜の教会での礼拝や結婚式や葬式のような特別の場合に備えて大切に保管されていた¹¹⁾。

このような結果、衣服の色と裁断の仕方は社会階級を正確に示す指標であった。18世紀のアメリカにおいては、通行人の衣服や携帯している身の回り品をみただけで、そのひとの職業を見分けることができた。例えば、靴直しは黒ず

⁶⁾ Charles E. Zaretsky, *The Amalgamated Clothing Workers of America: A Study in Progressive Trades-Unionism*, New York, 1934, p. 14.

⁷⁾ Egal Feldman, *Fit for Men: A Study of New York's Clothing Trade*, Washington, D. C., 1960, pp. 3, 90.

⁸⁾ Claudia B. Kidwell and Margaret C. Christman, *Suiting Everyone: The Democratization of Clothing in America*, Washington, D. C., 1974, pp. 25, 43.

⁹⁾ Kidwell and Christman, *Suiting Everyone*, pp. 25-27.

¹⁰⁾ 注文生産を依頼する時、顧客は自分で織物を用意していた。自家生産する場合は、都市においては店から織物を買入れしていたが、農村ではしばしば羊と亜麻から自家生産していた。しかも織物の自家生産は非常に手間と時間のかかる仕事であった。

Zaretsky, *Clothing Workers*, p. 13.

¹¹⁾ ピーター・F・コーブランド、濱田雅子訳『アメリカ史にみる職業着—植民地時代～独立革命期』せせらぎ出版、1998年、xii-xiii頁。

んだ革エプロンでそれとわかり、肉屋は青いエプロンと汚れを防ぐための腕カバーと鋭い刃物と腰に結び付けられたナイフケースでそれとわかった¹²⁾。

以上のように1820年代に既製服生産が開始されるまで、アメリカでは衣服生産は注文生産か自家生産によって行われ、当時の服装は階級や職業によって異なっていた。以下、既製服生産の拡大過程について確認する。

II 既製服生産の拡大

先述のように、既製服生産が開始されるまでアメリカにおける衣服生産は仕立職人による注文生産か自家生産によって行われていた。既製服生産は1820代にはじまり、2度の恐慌による一時的な中断はあったが南北製戦争が開始されるまで拡大を続けた。この間を通じてニューヨークは既製服生産の中心地であり続けた。以下、既製服生産の拡大の要因・過程、既製服生産の中心地としてのニューヨークの位置を確認する。

(1) 要因

既製服生産が19世紀前半に拡大した要因としては、産業革命による織物価格の低下とその大量供給、国内商業の拡大、政府の関税政策があった。またニューヨークにおいて既製服生産が他の都市よりも拡大した要因としては、既製服の素材としての織物の獲得が容易であったこと、移民の流入により安価な労働力が大量に利用できたこと、水力の欠如と地価の高騰により大規模な工場建設には適していなかったが、労働集約的な既製服産業が発展するのには適していたこと、南部と西部の商人に供与される信用が極めて寛大であったことなどがあった。

18世紀半ばから19世紀半ばにかけてはイギリスを中心とした産業革命の時代であった。これにより19世紀前半には従来高価で入手困難であっ

た織物が安価で大量に供給されるようになった¹³⁾。この結果、18世紀に衣服の生産拡大を妨げていた要因のひとつが解消された。既製服の素材としての織物の輸入に関しては、外国産・国内産に関らずニューヨークの既製服業者は他の都市の既製服業者よりも有利であった。1860年以前において輸入される織物の大半はイギリス産であり、例えば1825年にアメリカに輸入された織物の輸入総額1億2,000万ドルの内で8,500万ドルがイギリス産であった。このために1818年以降リバプールとの間に定期蒸気船航路が開設されていたニューヨークは織物の輸入に関して特に有利であった。例えば、1860年の時点で輸入された綿織物、毛織物、リネンとその他の亜麻布、絹織物など総額1億2,000万ドルの織物の内で1億100万ドルがニューヨーク港に輸入されていた¹⁴⁾。1820年以降はアメリカでも産業革命が起こり高級品以外の織物が代替されるようになり、その後1860年には生産額は輸入額を凌ぐ2億1,500万ドルまでに達した¹⁵⁾。この間、粗綿布価格は1ヤードあたり1815年の42セントから1830年の7.5セントまで下落していた¹⁶⁾。また当初はボストンで販売されていたニューイングランド産の織物もやがてニューヨークで販売されるようになった。ニューヨークではパール通りに輸入商人や問屋商人などの中間商人が数多く存在していたために、ここの既製服業者は容易に織物を入手することができた。パール通りでは競売も数多く行われており、既製服業者は競売を利用することによって安価に織物を入手することができた。1840年以降は多

¹³⁾ Kidwell and Christman, *Suiting Everyone*, p. 35.

¹⁴⁾ Robert G. Albion, *The Rise of New York Port, 1815-1860*, New York, 1939, pp. 38, 57-59.

¹⁵⁾ Chauncey M. Depew, ed., *1795-1895: One Hundred Years of American Commerce*, Vol. 2, New York, 1895, p. 557.

¹⁶⁾ Rolla M. Tryon, *Household Manufactures in the United States, 1640-1860: A Study in Industrial History*, Chicago, 1917, p. 276.

¹²⁾ コーブランド『職業着』, xiii-xiv頁。

くの既製服業者は工場から中間商人を介することなく直接仕入れることによって経費を削減し、より安価に織物を入手していた¹⁷⁾。

このような既製服の素材としての織物価格の低下とその大量供給に加えて、19世紀前半に国内商業が拡大する中で既製服への需要が拡大したことも生産拡大の要因としては重要であった。19世紀前半のアメリカの国内商業は北東部・南部・西部という相互補完的な地域間分業によって構成されていた。この分業体制の中で北東部は商工業に集中し、食料を西部から原料を南部から入手し両者に工業製品を供給するという役割を担っていた¹⁸⁾。北東部から南部・西部には織物をはじめとして様々な工業製品が販売されていたが、既製服も同様にこれらの工業製品の中のひとつとして両地域に販売されていた¹⁹⁾。北東部では多くの都市で既製服生産が行われていたがニューヨークはそれらの中で最大の生産地であった。そして、後に確認するようにニューヨークで生産される既製服の大半もやはり南部・西部向けのものであった。このように19世紀前半に国内商業が拡大する中で北東部において生産される既製服に対する需要が増大し生産拡大の要因のひとつとなった。このことは既製服生産の拡大の要因の中では特に重要なことであると思われる。

政府の関税政策も既製服生産の拡大を助けた要因のひとつであった。1816年以前は輸入される既製服に対する関税率は25%であったが、この年に30%まで引き上げられ、1828年にはさらに50%まで引き上げられた。また外国船で輸入される既製服には追加の関税があった。この政府の関税政策に守られて既製服産業は1825年から1835年にかけて拡大した。関税率は1846年に

30%に引き下げられ、1857年にはさらに24%までに引き下げられた²⁰⁾。しかし、この年に輸入された既製服は32万ドルであったのに対して国産の既製服の生産高は3,000万ドルから4,000万ドルであり輸入額をはるかに凌ぐものとなっていた²¹⁾。このためにこの時期までは保護関税の必要性は当初ほどなくなっていたと思われる。

1820年から1860年にかけてアメリカには5,457,914人の移民が到着し、この中で3分の2以上に当たる3,742,532人がニューヨーク港に上陸した²²⁾。これらの移民は、労働集約的なやり方で生産拡大を行っていた既製服産業に安価な労働力を大量にもたらした。既製服産業で働く労働者は当初はイギリス人、スコットランド人、アメリカ人が大半であったが、1840年以降は飢饉によりアメリカに移住したアイルランド人が多くの割合を占めるようになった。その後はドイツ人の割合も増加し、既製服産業で働く労働者の大半はドイツ人とアイルランド人が占めるようになった。例えば、これは注文生産と既製服生産の両方を含む数値であるが、1855年において衣服産業で働く仕立職人12,609人の中で96%にあたる12,109人が移民であった。その中で55%にあたる6,709人がドイツ人であり、34%にあたる4,171人がアイルランド人であった。また既製服産業では女性労働者に対する依存度が高く、多くの移民女性がお針子として働いていた。1845年まではお針子の大半はアメリカ生まれであったが、この後はアイルランド人とドイツ人が多数を占めるようになった²³⁾。

²⁰⁾ U.S. Census Office, *Eighth Census of the U.S., 1860, Manufactures*, Washington, D. C., GPO, 1865, p. xiii; Harry A. Cobrin, *The Men's Clothing Industry: Colonial through Modern times*, New York, 1970, p. 25.

²¹⁾ *Hunt's Merchants' Magazine*, Vol. 37, 1857, p. 261; Feldman, *Fit for Men*, p. 20.

²²⁾ Albion, *New York Port*, p. 418.

²³⁾ Robert Ernst, *Immigrant Life in New York City, 1825-1863*, New York, 1949, pp. 76-77, 215.

¹⁷⁾ Feldman, *Fit for Men*, pp. 22-24.

¹⁸⁾ 宮野啓二『アメリカ国民経済の形成—「アメリカ体制」研究序説』御茶ノ水書房、1971年、75頁。

¹⁹⁾ 鈴木圭介編『アメリカ経済史Ⅰ 植民地時代～南北戦争期』東京大学出版会、1972年、275-276、285頁。

19世紀前半のマンハッタンでは、水力の欠如と地価の高騰によって、大規模な工場建設が妨げられていた。このために水力と広い土地を必要とする企業の多くはよい条件を求めてニュージャージー州に移転していった。この一方で同時期の既製服産業においては、機械を導入することなく労働集約的なやり方で生産拡大を行っていたために、水力を必要としていなかった。また前貸し制度の下で労働者の大半が自宅で働いていたために広い土地の必要もなかった。このために先述のような大量の移民労働力を利用できるニューヨークは既製服産業が発展するには最適な場所であった²⁴⁾。

既製服の代金の支払いは現金で行われることはほとんどなく、6ヶ月から2年にわたる信用に基づいて行われた。1837年と1857年の恐慌に関らず、信用に基づく支払いはニューヨークの既製服業者と地方の商人、地方の商人と農村の消費者という卸売と小売の両方の段階で行われていた。信用に基づく販売は通常は6ヶ月までは無利子であり、それ以上の長期に渡る場合は10%程度までの利子が課せられた。農作物の不作時の危険性を考慮すると、これは南部・西部の地元には例のない極めて寛容なものであり、同地域の商人を多く引き付ける要因となった²⁵⁾。

（2）拡大過程

次に既製服生産の拡大過程を確認する。18世紀にも水夫や兵士のための既製服は存在していたが、それらはサイズもまちまちな非常に粗悪なものであった。本格的な既製服生産は1820年代に南部向けに始まり、販売される既製服は当

初は奴隷用コトンズや農民のための安物が大半であったが、やがてプランターのための上質な既製服も販売されるようになった。既製服生産は1837年の恐慌で一時停滞するが、1840年以降再拡大しより大規模な生産が行われるようになった。1840年以降は中西部向けの生産も拡大し、農村に安価なダンカリーやヒッコリーシャツが販売されるようになった。1848年の金鉱発見以降はカリフォルニアの鉱夫向けの既製服が販売されるようになり、1850年代初頭にはニューヨークの既製服業者は全国市場を制覇した。またこの間に人口の急増に伴ってニューヨークの地元住民にも既製服が販売されるようになっていた。ここでも販売される既製服は当初は粗悪なものであったが、やがて上質なものが扱われるようになった。既製服生産は1857年の恐慌によって再び停滞するが、1858年以降活況を取り戻し南北戦争が開始されるまで拡大を続けた²⁶⁾。

（3）既製服生産の中心地としてのニューヨーク

表1は、1860年における地域別の衣服生産の状態を示している。この年のセンサスには注文生産と既製服生産の区別がなされていないという問題がある²⁷⁾。このために、既製服生産に関する正確な比較は困難である。しかし、地域間のそれぞれの項目を比較することによっておよその推定を行うことはできる。表1によると、北東部は事業所数、投下資本金、男女労働者数、生産額のいずれの項目においても60%から80%までの高い割合をしめている。このことから、

²⁴⁾ Richard Stott, 'Hinterland Development and Differences in Work Setting: The New York City Region, 1820-1870', in William Pencak and Conrad E. Wright, eds., *New York and the Rise of American Capitalism: Economic Development and the Social and Political History of an American State, 1780-1870*, New York, 1989, pp. 48-49, 52-53.

²⁵⁾ Feldman, *Fit for Men*, pp. 16-17.

²⁶⁾ Richard B. Stott, *Workers in the Metropolis: Class, Ethnicity, and Youth in Antebellum New York City*, Ithaca, N. Y., 1990, p. 38; Christine Stansell, *City of Women: Sex and Class in New York, 1789-1860*, New York, 1986, pp. 107-109; Feldman, *Fit for Men*, pp. 4-8. 既製服生産は南北戦争の開始によって壊滅的な打撃を受けた。その後、戦争中に軍服への注文が急増するまで生産は再開されなかった。Cobrin, *Men's*, p. 37.

²⁷⁾ 1900年以前のセンサスで注文生産と既製服生産の区別がなされているのは1890年と1900年のセンサスだけであり、この年以降は既製服生産のみとなった。

表1 1860年における地域別の衣服生産

	事業所数	資本金(ドル)	男子労働者数	女子労働者数	生産額(ドル)
北東部	2,386	19,090,132	30,413	47,359	56,644,909
中西部	1,040	5,186,801	9,687	9,689	13,907,625
南部	352	639,995	1,038	681	2,573,045
太平洋沿岸諸州	15	22,265	35	1	94,186
計	3,793	24,939,193	41,173	57,730	73,219,765

(出典) U.S. Census Office, *Eighth Census of the U.S., Manufactures, 1860*, Washington, D.C., GPO, 1865, p. lxvi.

表2 1860年における北東部の州別の衣服生産

	事業所数	資本金(ドル)	男子労働者数	女子労働者数	生産額(ドル)
ニューヨーク	860	8,038,361	14,767	17,696	25,095,299
ペンシルバニア	672	5,256,201	7,828	10,090	12,305,541
マサチューセッツ	196	1,498,400	1,720	3,927	6,070,975
ニュージャージー	153	1,611,165	2,267	4,991	4,042,002
メリーランド	148	1,270,150	2,242	3,811	3,271,116
その他	357	1,415,855	1,589	6,844	5,859,976
計	2,386	19,090,132	30,413	47,359	56,644,909

(出典) *Eighth Census, Manufactures*, p. lxvi.

1860年のアメリカでは衣服生産の大半は北東部でなされていたことが確認できる。それぞれの地域の人口に大差がなかったことを考慮にいれると²⁸⁾、衣服生産が進んでいる北東部から衣服生産がそれほど進んでいない他の地域に既製服が販売されていたことが推測できる。そして、後に確認するようにニューヨーク、フィラデルフィア、ボストンなど北東部の都市から南部・西部に既製服が既に多数販売されていた。

このように既製服生産が拡大した北東部においてもニューヨークは生産の中心地であった。ニューヨークは1835年までにはすでに既製服生産の中心地となっていた。1840年以降はペンシルバニア州のフィラデルフィア、マサチューセッツ州のボストン、メリーランド州のボルチモア、ニュージャージー州のニューアーク、オハイオ州のシンシナティなど他の都市においても既製服生産が拡大したがニューヨークはそれらを上回る拡大を続けた。例えば、ボストンでは1840年の時点で既製服業者は2つしかなく、その売

上は20万ドル以下であった。しかし、15年後には30の既製服業者が存在し、その売上は1,200万ドルとなった。またシンシナティは1840年の時点で既製服の売上は194万ドルであったが、10年後には130%増加し442万ドルとなった。しかし、ニューヨークでは1841年の時点で売上は250万ドルあり1853年には2,000万ドルとなっていた²⁹⁾。表2は、1860年における北東部の州別の衣服生産の状態を示している。これによるとニューヨーク州の数値は全ての項目において他の州よりも大幅に上回っており、北東部における衣服生産の中心地であったことが確認できる。このことから、衣服生産の中に占める既製服生産の数値も他の州よりも高いことが推定できる。またこのニューヨーク州の860の事業所の中で303、8,038,361ドルの投下資本金の中で5,645,800ドル、32,463人の男女労働者数の中の21,568人、25,095,229ドルの生産額の中で17,221,856ドルがニューヨーク市とその周辺地のものであった³⁰⁾。

²⁸⁾ 1860年の時点で北東部・南部・西部の間に総人口の差はあまりなかった。U.S. Dept. of Commerce, *Historical Statistics of the U.S.: Colonial Times to 1957*, Washington, D. C., 1960, p. 13.

²⁹⁾ Feldman, *Fit for Men*, pp. 4-6; Edwin T. Freedley, *Leading Pursuit and Leading Men*, Philadelphia, 1856, pp. 125-126

³⁰⁾ *Eighth Census, Manufactures*, p. lx.

表3 1860年における州別のシャツ・カラー・服飾品生産

	事業所数	資本金(ドル)	男子労働者数	女子労働者数	生産額(ドル)
ニューヨーク	74	935,450	257	7,765	3,779,111
ペンシルバニア	81	570,650	116	3,374	1,359,614
コネチカット	19	547,000	85	2,593	1,322,900
その他	45	203,400	70	1,336	757,165
計	219	2,256,500	528	15,068	7,218,790

(出典) *Eighth Census, Manufactures*, p. lxxv.

表3は、1860年の時点における州別のシャツ・カラー・服飾品生産の状態を示している。これは衣服生産とほぼ同じような結果を示している。表3によると、これらの製品はニューヨーク州、ペンシルバニア州、コネチカット州の北東部3州で生産の大半が行われていることが確認できる。特にニューヨーク州の数値は事業所数を除く全ての項目で他の州よりも大幅に上回っており、労働者数と生産額に関しては全体の半数以上を占めている。このことから、ニューヨーク州から南部・西部にこれらの製品が既製品として販売されていたことが推測できる。

（４）小括

1820年代までアメリカでは衣服生産は注文生産か自家生産によって行われていたが、この時期以降は既製服生産が本格化した。既製服生産の拡大には様々な要因があったが中でも国内通商が拡大する中で南部・西部からの需要が増大したことが重要であった。ニューヨークは多くの条件に恵まれていたために既製服生産の中心地となり、生産された既製服は南北戦争の直前までには既に全国市場に向けて販売されていた。以下、需要の増大に対応していかなる生産が行われていたかを確認する。

Ⅲ 生産工程

（１）概観

既製服生産は当初は仕立職人が注文生産と同時に進んでいた。これは先述の兵士や水夫のための粗悪な既製服であり、規模は非常に小さかったが、注文生産が少ない冬などに雇われ職人に

仕事を与えるために生産が行われていた。また簡単な仕事であるシャツやパンタロンの生産には女性が一年中雇用されていた。1820年代に入り南部の奴隷用の衣服の需要が増大すると、この生産のためにより多くの女性が雇用されるようになり、これらの女性は雇われ職人が注文生産の少ない時期にしか行わなかったコートの縫い合わせなども行うようになった³¹⁾。やがて既製服生産においては、中心的な作業のみを行うマニュファクトリーが設置されはじめ、より大規模な前貸し制度による生産が開始された。注文生産と既製服生産は当初は同時に行われていたが、やがて両者は相互に独立した部門をなすようになり、その後既製服生産が拡大すると注文生産をやめ既製服生産のみを行う企業も現れ始めた³²⁾。

前貸し制度においては、まず熟練を要する布地の裁断などの工程がマニュファクトリーで行われ、残りの熟練を要さない布地の縫い合わせなどの工程は外部に請け負われた。これは分業化を押し進め、マニュファクトリーの内部で働く熟練労働者の割合を減らし、外部の自宅で働く不熟練労働者の割合を増やす労働集約的なやり方であった³³⁾。これは豊富な労働力を利用できるニューヨークに最も適したやり方であっ

³¹⁾ Stansell, *City of Women*, p. 107-108.

³²⁾ Jesse E. Pope, *The Clothing Industry in New York*, Columbia, Mo., 1905, pp. 14-15.

³³⁾ このようなやり方は、需要の季節的変動の大きい既製服産業に特に適していた。既製服業者は、需要に応じて定期的に外部労働者を解雇したり雇用したりすることによって、投資を最小化していた。Stott, 'Hinterland Development', pp. 52-53.

表4 1850年における仕事場の規模別の労働者の割合(%)

0～5人	6～20人	21～49人	50人以上
0.5	3.5	4.2	91.9

(出典) ウィレンツ『民衆支配の讃歌』, 付録, 図表に開する覚え書き, 11頁。

(注) 50人以上は, 前貸し制度を用いている作業場を示す。

た。道具や技術は以前のままであり, 機械に関しては1850年代にミシンが導入されるまで使用されていなかった³⁴⁾。

既製服生産は通常は多くの資本を持つ親方職人によって始められた。初期には雇われ職人が小規模に行う場合もあったが, やがて大規模な卸売向けの生産が中心となり³⁵⁾, 1830年代半ばのニューヨークにはすでに300人以上を雇用して既製服生産を行う企業が存在していた。これらの企業は1837年の恐慌で多くは倒産したが, 1840年後半にはより大規模な企業が現れた。例えばニューヨーク最大の既製服業者のハンフォード社では1849年に75人をマニュファクトリーの内部に雇用し, 4,000人を外部に雇用していた。またブルックス・ブラザーズも同年に78人をマニュファクトリーの内部に雇用し, 外部に1,500人を雇用していた³⁶⁾。表4は, 1850年の衣服産業における仕事場の規模別の労働者の割合を示している。これによると同年の衣服産業においては労働者の大半が前貸し制度を用いて50人以上を雇用する作業場で働いていたことが確認できる。この時期には, 注文生産においても地元の需要の増大に対応して前貸し制度が用いられるようになっていたために, これらの中で既製服生産で働く労働者がどれほどの割合を占めていたかは判別することはできないが, 既製服生産においても大半の労働者は前貸し制度

の下で働いていたことが推測できる。

(2) マニュファクトリー

マニュファクトリーは前貸し制度で中心的な役割を果たす建物であり, ここでは既製服生産の他に小売や注文生産も行われていた。例えば, ワイルド社の1854年のマニュファクトリーは, 間口50フィート, 奥行き154フィートの建物であり, 1階では上質な商品の販売と会計, 2階では中間的な価格の商品の販売と布地の配布と受け取り, 3階ではあまり質のよくない商品の販売, 4階では裁断のための布地の受け取り, 準備, 裁断が行われていた。そして, ここでは常時20人の裁断工が雇用されていた。マニュファクトリーの内部では分業化が進み, 仕立職人がそれぞれ単一の仕事に携わった。管理も厳格であり, 例えば, マンロー社ではすべての労働者が生産した製品に自分の番号の入った札を貼り, もし問題がみつくと解雇された³⁷⁾。既製服生産において最も熟練を要する工程は布地の裁断であり, これを行う裁断工は定期雇用を保証され³⁸⁾, 比較的高賃金を得た。彼らには型紙を裁断する迅速さと正確さが強く要求され, 1830年代には技巧的な仕上げよりも南部向けの迅速な裁断の仕方が一般的になった。裁断工を監督するのは裁断長であり, 彼らは裁断された布地の配布と回収を行う仕事も担当し, 既製服産業の中で最もよい賃金を得た。このような裁断工や裁断長の仕事は注文生産で働いていたアイルランド人仕立職人のものとなった³⁹⁾。

ニューヨークの主要な既製服業者のひとつであるデブリン社は1849年の時点でジョン通りに

³⁷⁾Freedley, *Leading Pursuit*, pp. 132-133, 135.

³⁸⁾例えばハンフォード社の裁断工は, 春の2週間と秋の4週間以外は年間を通じての雇用を保証されていた。Hunt's, Vol. 20, 1849, p. 348.

³⁹⁾ショーン・ウィレンツ, 安武秀武監訳『民衆支配の讃歌—ニューヨーク市とアメリカ労働者階級の形成 1788～1850』上, 木鐸社, 2001年, 151頁; Pope, *Industry*, pp. 22-23, 27.

³⁴⁾機械に関しては, ミシンの他にも1850年代には裁断機がフランスで発明されていたが, これがアメリカで使われるのは1870年代になってからであった。Feldman, *Fit for Men*, p. 97.

³⁵⁾Pope, *Industry*, pp. 19-20.

³⁶⁾Stott, *Metropolis*, p. 39.

2つの建物を所有しており、内部には小売部門、注文生産部門、既製服部門、いくつかの明るい部屋を含む裁断部門などがあり、その大きな地下室には大量の厚手の毛織物とトリミングの在庫があった。裁断工はコート、ベスト、ズボン、トリミングの4部門に分かれて仕事を行い、賃金は迅速さや技量などに応じて週3ドルから15ドルまでに等級わけされていた。また裁断長は週25ドルから150ドルまでの高賃金を得ていた⁴⁰⁾。デブリン社の1858年のブロードウェイの建物は5階建てですべて白い大理石で建築されており、間口50フィート、奥行き110フィートあり、ニューヨークで最も美しい建物のひとつであった⁴¹⁾。

先述のハンフォード社の裁断工は1848年から1849年にかけて100,580着の衣服を裁断し、1日平均1,135着の衣服を生産した⁴²⁾。生産工程は布地が到着してから仕上げのまで全工程が時計仕掛けのように規則正しく行われた。その工程は布地が到着すると十分な検査を行い汚れがあれば取り除く。この検査の後、布地はどのような形やサイズに裁断するかを指示された裁断工の所に送られる。裁断がなされた後の布地はボタン付けなどを行うトリマーに渡される。この後は裁断長によって外注され縫い合わせと仕上げが行われる。回収された既製服は裁断長によって検査がなされ、販売部門に送られるというものであった⁴³⁾。

（3）外部労働

マニュファクトリーで布地の裁断やトリミングがなされた後の工程はお針子や下請け職人が請け負った。既製服産業では業界全体が信用制度に依存していたために現金が常に不足し、賃金の切り下げと支払いの引き延ばしが行われて

いた。このために外部で仕事を請負う労働者たちは自宅において低賃金で長時間の過酷な労働に従事した。また大量の低賃金労働者が利用できたことにより1845年までに正規の徒弟制度は崩壊した⁴⁴⁾。技術に関しては、既製服産業で働くアイルランド人やドイツ人の仕立職人は母国において技術を習得していた⁴⁵⁾。

既製服産業は女性労働に対する依存度が高く、多数の女性がお針子として働いていた。例えば1850年のハンフォード社の4,000人の外部労働者の中で半分は女性であった。お針子が仕事を得る方法は2つあり、ひとつは既製服業者の裁断長から直接貰うやり方であり、もうひとつは既製服業者とお針子を仲介する請負人から間接的に貰うやり方であった。仕事を得るとお針子は仕事の完了日を設定されると同時に材料を紛失した場合や傷をつけた場合に対する保証金を徴収された。これは材料費のあたる1ドルから8ドルまでのものであり、確実に返却させるためのものでもあった。仕事の出来がよくない場合、賃金は支払われず保証金も返却されなかった⁴⁶⁾。ひとつの仕事を終えた後、お針子が次に仕事を得られるという保証はなかった。彼女たちは毎日働けるとは限らず、週に1日か2日は働けない日が必ずあった。このためにお針子は仕事を求めて様々な雇用主を探さなければならなかった。また既製服は需要の季節的変動が大きかったために、既製服業者が夏と冬のために生産を開始する4月と10月には仕事は豊富であったが、それ以外の時期は雇用への不安が常にあった⁴⁷⁾。縫い合わせの仕事は通常は男性が女性には重くて扱いづらいコートをを行い、女性は主にベスト、シャツ、ズボンを行った。またお針子

⁴⁰⁾ Hunt's, Vol. 20, 1849, p. 117.

⁴¹⁾ Freedley, *Leading Pursuit*, p. 134.

⁴²⁾ Cobrin, *Men's*, p. 25.

⁴³⁾ Freedley, *Leading Pursuit*, pp. 129-130.

⁴⁴⁾ ウィレンツ『民衆支配』, 152-153頁。

⁴⁵⁾ Zaretz, *Amalgamated Clothing Workers*, p. 17.

⁴⁶⁾ Stott, *Metropolis*, p. 40; Feldman, *Fit for Men*, pp. 102-103.

⁴⁷⁾ Stansell, *City of Women*, p. 110.

の仕事は都市部ばかりではなく、農村の女性にも請け負われていた⁴⁸⁾。

お針子は期限を守るために長時間働いたが得られる賃金はわずかなものであった。1845年の時点でお針子に支払われる出来高賃金は、ズボンが18セントから30セント、ベストが25セントから50セント、薄手のコートが25セントから37.5セント、厚手のコートが1ドルというものであった。これらの中でズボンとベストは腕のよいお針子なら1日で仕上げることができたが通常は2日かかる仕事であった。また厚手のコートは3日以上かかる仕事であった。お針子はこれらの仕事を行い週1.5ドルから2ドルしか稼ぐことができなかった。また週1ドルも稼げない者も多くいた。シャツの出来高賃金は最も低く週1.5ドル以上になることはほとんどなかった⁴⁹⁾。お針子は針や糸などを自ら揃える必要があり、これも賃金を引き下げる要因となった⁵⁰⁾。1853年の時点でも出来高賃金は低いままであり、夏用のベストが18セント、パンタロンが24セント、薄手のコートが18セントであり、これらの仕事を1日12時間行っても24セントしか稼ぐことができなかった。またシャツの出来高賃金は4セントから8セントであった⁵¹⁾。この年の4人家族の労働者に必要な年収は600ドルであったのに対して、お針子の年収は最もよい場合でも91ドルであった。これは職についている男性と暮らしている女性や独身女性にとってぎりぎりの収入であった。しかし、お針子の中にはシングルマザーも含まれており、彼女たちは実際に男性の支えなしに家計を支えていた⁵²⁾。

縫い合わせの仕事は当初はアメリカ人女性とアイルランド人女性が行っていたが、やがてド

イツ人仕立職人が引き継ぐようになった。彼らは特に1848年以降既製服産業に参入するようになり、特徴的な家族ぐるみの下請けを行った。ドイツ人の家庭では主人が雇用主と交渉し、最も熟練を要する仕事を行い、さまざまな仕事の管理をし、その妻と子供は補助的な仕事を行った。1850年代には出来高賃金は相当下落していたために、下請け職人は家族の助けなしには生活することはできなかった。また支払われる賃金は家族ぐるみであったために「仕立職人は妻と子供がいなければ役に立たぬ」ということがドイツ人の間の格言となった⁵³⁾。

(4) 小括

以上のように19世紀前半における既製服生産は前貸し制度を用いた労働集約的なやり方で行われていた。これは同時期に機械を用いて工場生産を行っていた繊維産業や「アメリカ的生産方式」を用いていた兵器産業とは異なった生産方法であった。1850年代以降は既製服産業にもミシンが導入され、縫い合わせをマニュファクトリーの内部で行う工場制度への移行が始まった。しかし、工場制度に移行した後もそのやり方はどちらかといえば労働集約的なものであった⁵⁴⁾。この一方でミシンが外部労働者の家にも導入され、前貸し制度は20世紀まで存続していた⁵⁵⁾。このために19世紀前半とその後の時期におけるやり方に連続性がある。このことから19世紀前半の衣服産業では従来の自家生産と注文生産の段階を脱してすでに工業化が進展していたといえる。

⁵³⁾Pope, *Industry*, p. 27; Stansell, *City of Women*, p. 117; Abbott, *Women in Industry*, pp. 221-223.

⁵⁴⁾既製服産業においては、機械の導入後も生産速度を上げるのは限界があり、依然として労働集約的な産業に留まった。チャンドラー『経営者の時代』上、431頁。

⁵⁵⁾お針子の多くはミシンを購入する資金を持っていなかったために、ミシンが備え付けられている工場内部で働くようになった。この一方で資金のある下請け職人はミシンを購入し自宅での作業を続けた。Stansell, *City of Women*, pp. 107, 118; Feldman, *Fit for Men*, pp. 98, 110.

⁴⁸⁾Stott, *Metropolis*, p. 40; Feldman, *Fit for Men*, pp. 103-104.

⁴⁹⁾*New York Daily Tribune*, March 7, Aug. 14, 1845.

⁵⁰⁾Pope, *Industry*, p. 29.

⁵¹⁾*New York Daily Tribune*, June 8, 1853.

⁵²⁾Stansell, *City of Women*, p. 111.

表 5 1860年における南部の州別の衣服生産

	事業所数	資本金(ドル)	男子労働者数	女子労働者数	生産額(ドル)
ルイジアナ	213	274,420	578	252	1,707,072
バージニア	63	158,850	220	373	421,253
テネシー	24	32,500	52	17	137,813
その他	52	174,225	188	39	306,907
計	352	639,995	1,038	681	2,573,045

(出典) *Eighth Census, Manufactures*, p. lxvi.

IV 全国市場への販売

最後に既製の全国市場への販売過程を確認する。既に触れたように既製の販売は1820年代に南部向けに始まった。その後中西部と太平洋沿岸諸州が販売地域に加わり、1850年代にはニューヨークの既製業者は全国市場に向けての販売を行うようになっていた。この一方で人口の急増に伴いこれらの遠隔地だけではなくニューヨークの地元の住民にも既製の販売が行われ始めた。これらの結果、19世紀半ばまでには既製の普及が一定程度まで進んでいた。以下、それぞれの地域への既製の販売過程をまず確認し、それらの結果既製がどの程度まで普及したかを確認する。

(1) 南部

南部への既製の販売はニューヨークの既製業者にとって最も重要なものであった。1840年代までは中西部はまだ入植の初期段階であり、アパラチア山脈以西には農村か小さな町しか存在していなかった。またカリフォルニアと南西部は1846年までメキシコ領であり、北西部の国境線はイギリスとの間でまだ確定していなかった。このために1860年以前は南部向けの既製はニューヨークから他州に販売される既製の50%以上を占めていた。1850年代には中西部とカリフォルニアへの既製販売が開始されたが、南部向けの販売は依然として重要性を保ち続けた⁵⁶⁾。

19世紀前半の南部では綿花生産に多くの資本

が費やされていたために、他の工業製品と同様に既製生産はほとんど行われていなかった。

1850年代以降は南部においても既製生産がある程度拡大したが、その生産額は依然として少なかった。表5は、1860年における南部の州別の衣服生産の状態を示している。これによるとルイジアナ州がいずれの項目においても多くの割合を占めていることが確認できる。この州では1850年から1860年にかけて生産額が402%増加するなど衣服生産の拡大が進んでいた⁵⁷⁾。しかし、バージニア州を除く他の州ではほとんど衣服生産が行われていない。南部全体の衣服の生産額は全米の3.5%、ニューヨーク州の10%にすぎず、北東部で5番目のメリーランド州にも及ばなかった。このために、南部では多くの既製を北東部から購入する必要があった。

南部への既製の販売に関しては、ニューヨークから南部の港に向けて定期船が多く就航していたために、この既製業者は他の海港都市の既製業者よりも有利であった。ニューヨークは1832年までにチャールストン、サバナ、フロリダとの半月ごとの定期航路を確立しており、1852年までにはニューヨーク港と南部諸港を連結する定期蒸気船は17隻となっていた。このためにニューヨークの既製業者は南部からの需要が拡大した時により迅速に対応することができた⁵⁸⁾。

⁵⁷⁾ *Eighth Census, Manufactures*, p. lxvi.

⁵⁸⁾ 表1, 表2を参照。

⁵⁹⁾ Emony R. Johnson et al., eds, *History of Domestic and Foreign Commerce of the United States*, Vol. 1, Washington, D. C., 1915, p. 346.

⁵⁶⁾ Cobrin, *Men's*, pp. 32-33.

既製服の販売方法に関して、南北戦争以前は地方を巡回するセールスマンが販売を行うという慣行はほとんど存在しておらず、南部と西部の商人は毎年春と秋の2回直接ニューヨークを訪問し既製服を購入した。商人は往復で4週間かけてニューヨークを訪問し、2週間の滞在期間中に既製服を購入した。既製服業者は商人がニューヨークを訪問する4ヶ月ほど前から生産を開始し、商人の滞在期間中に集中して販売を行った。ニューヨークにおいて既製服は既製服業者の代理人によって販売されるだけでなく、競売によっても販売され、商人は競売においては特に安価な既製服を購入していた。競売は南部の主要な海港でも行われ、ニューヨークを直接訪問できない商人が利用していた⁶⁰⁾。

南部では既製服はゼネラルストアで他の商品と並んで販売されるのが一般的であり、例えばジョージア州コロンバスのゼネラルストアでは1834年に革、銃、砂糖と共に「ニューヨークの最高の企業の既製服20箱」を販売していた。都市においてはゼネラルストアの他に専門小売店でも既製服が販売されるようになり、1820年代以降の南部都市では多数の専門小売店が存在するようになった。例えば、ニューオーリンズでは1822年に110店あり、チャールストンでは1828年に9店、ナッシュビルでは1860年に42店あった。ニューヨークの既製服は南部で特に人気が高く、広告でもそのことが強調された。例えば、ジョージア州コロンバスのある衣服店の店主は「優れた技術で製造されたコートやカシミアのパンタロンなど各種既製服をニューヨークから持ち帰ったばかりである」と広告していた。またニューオーリンズのある店では実際に‘New York Clothing Store’と名づけられていた⁶¹⁾。

既製服業者はニューヨークを訪問する商人に対して既製服を販売するだけでなく、南部の都市に直営の小売店や卸売店をもつようになり、1820年代には既に多くの既製服業者がニューオーリンズをはじめとする南部の都市に直営店をもっていた。直営店をもった場合、通常は企業のパートナーのひとりがニューヨークのマニュファクトリーを管理し、別のパートナーが南部の直営店を管理した⁶²⁾。例えば、マンロー社はニューヨークのブロードウェイにマニュファクトリーをもつと同時にニューオーリンズのマガジン通りに大規模な小売店をもっていた。この小売店には1847年の時点で5万ドル分の在庫があり、翌年にそれは6万ドル分となり、2,300のコート、1,900のパンタロン、1,500のベスト、8,000のシャツが含まれていた。3年後には在庫は9万ドル分となり、その種類もあらゆるサイズの大人から子供までのものが揃っていた。このマンロー社の小売店ではニューオーリンズでの販売を拡大させるために夜の9時半まで営業を行っていた⁶³⁾。シャツ製造業者のハート社はニューヨークのウィリアム通りにマニュファクトリーをもつと同時にニューオーリンズのキャンプ通りに‘New Orleans Shirt Depot’という名前の直営店をもっていた。そこには常に大量の在庫がなされており、例えば1847年の時点でこの小売店には5,000のリネンシャツ、20,000のモスリンシャツ、3,000の色つきのシャツ、5,000のチェック柄のシャツなどが在庫されていた。そして、これらの在庫は常にニューヨークのマニュファクトリーによって拡充されていた⁶⁴⁾。

(2) 中西部

1825年のエリー運河の開通後、ニューヨークの既製服業者は中西部への販売を開始した。中西部では南部に比べると既製服生産が進んでい

⁶⁰⁾Feldman, *Fit for Men*, p. 11, 15, 26; Cobrin, *Men's*, p. 29.

⁶¹⁾Feldman, *Fit for Men*, pp. 39-41.

⁶²⁾Cobrin, *Men's*, p. 34.

⁶³⁾Feldman, *Fit for Men*, p. 42.

⁶⁴⁾*New Orleans Daily Picayune*, Oct. 16, 1847.

表 6 1860年における中西部の州別の衣服生産

	事業所数	資本金(ドル)	男子労働者数	女子労働者数	生産額(ドル)
オハイオ	448	3,052,365	6,356	6,927	8,771,068
ケンタッキー	79	595,490	565	1,050	1,093,975
ミズーリ	171	358,250	650	274	948,269
ウィスコンシン	81	337,071	649	386	912,729
イリノイ	69	213,460	479	148	774,597
その他	192	630,165	988	904	1,406,987
計	1,040	5,186,801	9,687	9,689	13,907,625

(出典) *Eighth Census, Manufactures*, p. lxvi.

た。しかし、その生産では中西部のすべての需要を満たすことはできず、やはり北東部から購入する必要があった。表 6 は、1860年の中西部における州別の衣服生産の状態を占めている。これによるとオハイオ州がいずれの項目においても大半を占めていることが確認できる。この州の生産額はニューヨーク州、ペンシルバニア州を除く北東部のいずれの州より大きいものであった。そして、オハイオ州では、448の事業所の中で222、3,052,365ドルの投下資本金の中で2,220,900ドル、6,356人の男子労働者数の中の5,016人、6,927人の女子労働者の中で4,963人、8,771,068ドルの生産額の中で6,381,190ドルがシンシナティのものであった⁶⁵⁾。この他にもミズーリ州のセントルイスやイリノイ州のシカゴでも衣服生産が拡大していた。しかし、中西部全体の生産額は南部よりもはるかに大きかったが、北東部と比べるとあまり大きなものとはいえなかった。中西部へ販売に関しては、ボストン、フィラデルフィアなどの東部都市の既製服業者やシンシナティをはじめとする中西部都市の既製服業者との競争になったために、ニューヨークの既製服業者は南部ほど優位に立つことはできなかった⁶⁶⁾。

中西部ではセントルイスとシカゴが卸売の中心地となって地方への既製服販売が行われた。セントルイスではフィッシュやスパルディング

などの問屋商人がニューヨークの織物と既製服を扱っていた。1830年代半ばには専門の衣服問屋商人が現れた。例えば、あるセントルイスの商人はニューヨークと他の都市の既製服業者と契約し、毎月最新の東部のスタイルの既製服を購入していた。また衣服問屋商人のW. V. ディベンターは1849年の広告で「我々は蒸気船 *Avalanche* と *Oswego* を通じて上等の既製服を購入した。これらは以前の在庫に加わり、小売向けの在庫は質、量ともによいものとなった」と述べていた。またこの問屋商人は同じ蒸気船で地方への卸売のための既製服も購入していた。シカゴは1833年までは人口200人以下の村であったが、1850年代に鉄道の発展と共にセントルイスと並ぶ卸売の中心地となった。1852年までシカゴでは既製服の卸売は重要ではなかったが、この年にハンチントンが初めて卸売を開始した。そして、1859年までには東部からの既製服はシカゴで扱われる商品の中で最も重要なものの一つとなった⁶⁷⁾。

既製服業者は南部の場合と同様にニューヨークを訪問する問屋商人や小売商人に対して既製服を販売するだけでなく、中西部にも直営店を持つようになった。1840年以降は多くのニューヨークの既製服業者がセントルイスに直営店を持つようになり、例えばロビン社はニューヨークにマニュファクトリーを持つと同時にセントルイスの北メイン通りに大規模な直営店を持ってお

⁶⁵⁾ *Eighth Census, Manufactures*, p. lxi.⁶⁶⁾ Feldman, *Fit for Men*, pp. 56-58.⁶⁷⁾ Feldman, *Fit for Men*, pp. 54-55.

り、それは「既製服販売の殿堂」であった⁶⁸⁾。

(3) 大西洋沿岸諸州

1848年のカリフォルニアの金鉱発見以降は大西洋沿岸諸州への既製服販売が始まった。この地域では金鉱以来衣服への膨大な需要が存在するようになったが、それに対応するだけの生産はなされていなかった。1860年の時点でカリフォルニア州、オレゴン州、ニューメキシコ准州の事業所は15にすぎず、生産額は全米の0.1%を占めるにすぎなかった。このためにこの地域の衣服の大部分は他の地域で生産されたものであった⁶⁹⁾。

太平洋沿岸諸州への既製服の販売に関しては、ニューヨークの既製服業者はこの地域への海上輸送手段に恵まれていた。ニューヨーク港からはサンフランシスコ行きの帆船の3分の2以上が出航しており、南部の場合と同様にこの既製服業者は他の海港都市の既製服業者よりも有利であった⁷⁰⁾。

ハンフォード社など大手の既製服業者はサンフランシスコや内陸の間屋商人を通じてこの地域への販売を行った。またサンフランシスコが1848年の人口800人の村から5年後に人口5万人の都市へと成長するとニューヨークの既製服業者は南部と中西部の場合と同様にサンフランシスコにも直営の小売店や卸売店を持つようになった⁷¹⁾。

この地域に販売される既製服は当初は鉋夫向けのものではあったがやがて上質な既製服も販売されるようになった。サンフランシスコに直営店を持つ既製服業者は自社の既製服がニューヨークのマニュファクトリーで生産された最もよい東部のスタイルのものであることを強調した。

例えば、ジョンソン社とキャンフィールド社は1851年に帆船 *Albert, N. B. Palmer* と *Flying Cloud* で搬送された多種類の既製服について「ここ（サンフランシスコ）で最も完全で最大の品揃えである。これらはすべて我々自身で生産しているために、スタイル、質、材質の全てを推薦することができる」と広告していた。またキーズ社は既製服がニューヨークのマニュファクトリーより定期的かつ頻繁に搬送されていることを強調した既製服業者の一つであった。この企業はニューヨークのブロードウェイにマニュファクトリーを持ち「最新かつ最も美しいスタイルの商品がサンフランシスコに定期的に送られている」と広告した。1852年以降従来のケーブ岬を帆船で迂回する航路よりも短くて早いパナマやニカラグア経由の定期蒸気船航路が開設されるとキーズ社では月に1度新しい既製服をサンフランシスコに搬送するようになった⁷²⁾。

(4) 地元住民への販売

既製服の大半は以上のような南部・西部という遠隔地に向けて販売されるものであったが、この一方でニューヨークの人口が1820年の12万人から1860年の80万人に急増すると地元の住民にも既製服が販売されるようになった⁷³⁾。

ニューヨークにおいて既製服は直営小売店と専門衣服店で大量に販売されていた。例えばハンフォード社はパール通りに4つの建物を所有し、その中にある13の部屋の中の5つをコート、ズボン、ベスト、シャツ、下着の販売のために使用していた⁷⁴⁾。また在庫も豊富であり、バンダービルト社では1847年に5,000以上の既製服を在庫していた。コナウェイ社では1850年に1,000のコート、5,000のベスト、5,000のズボンの在庫があり、ブロードウェイの別の衣服店では1853年に3,000のコートと3,000のベストの在

⁶⁸⁾ J. N. Taylor and M. O. Crooks, *Sketch Book of Saint Louis*, St. Louis, 1858, pp. 272-273.

⁶⁹⁾ *Eighth Census, Manufactures*, p. lxvi.

⁷⁰⁾ Albion, *New York Port*, p. 354.

⁷¹⁾ Feldman, *Fit for Men*, p. 63.

⁷²⁾ Feldman, *Fit for Men*, pp. 60, 64-66.

⁷³⁾ Ernst, *Immigrant Life*, p. 191.

⁷⁴⁾ *Hunt's*, Vol. 20, 1849, p. 348.

庫があった⁷⁵⁾。

既製服は主にブロードウェイ、チャタム通り、パワリー通りの小売店で販売されていた。ブロードウェイは衣服の流行の中心地であると同時に地価が最も高い通りでもあった。このためにここでは最も高価な衣服が販売されていた。この一方でパワリー通りは地価が安く、安価な既製服を販売する小売店が多数存在していた。例えばあるサウス・カロライナからの旅行者は1851年に「パワリー通りではブロードウェイとほぼ同じような質の商品を全て15%から20%安く買うことができる」と述べていた。またある商人はブロードウェイからパワリー通りに移転するとすぐに10%の値下げを行った。このパワリー通りは1849年までにすでに既製服販売の中心地となっていた⁷⁶⁾。

（５）既製服の普及

以上のように1820年代に生産が始まった既製服は19世紀半ばまでにはすでに全国市場に向けて販売されていた。そして、この時期まで既製服の普及が一定程度まで進んでいた。既製服の普及の要因としては、まず価格の低下があった。これに加えて既製服業者自身も広告を用いて販売促進を行っていた。また販売される既製服の種類もすでに豊富なものとなっていた。しかもニューヨークにおいては以前のような職業や階層による服装の差異が消滅した。

既製服の価格に関して、当時の大部分の既製服業者は価格を広告に記さず、広告される価格は1844年までは注文生産のものであった。しかし、1844年以降は幾つかの既製服の価格が広告されている。例えば、1845年にオーエン社ではコート、ベスト、ズボンというスーツ一揃えを14ドルで販売し、別の企業では1847年に夏用のスーツを3ドルから25ドルで販売していた。

1849年に開店した‘Five Dollar Suit Store’の店主は、そのクロス・コートとファンシー・ベストとカシミアのズボンの組み合わせからなるスーツについて「5ドル・スーツはかつてないほど優美かつ上品であり、最も安価な春用のスーツである」と広告していた。またエヴァンズ社のスーツは1857年に2.5ドルで販売されていた⁷⁷⁾。富裕層が着用するスーツが70ドル以下で購入できることはまれであったことを考慮すると⁷⁸⁾、既製服の価格は注文生産よりもはるかに安価であったといえる。

既製服業者は広告を用いてより多くの南部・西部の商人がニューヨークを訪問するように促した。広告は地方でも購読されていたニューヨークの新聞と地方の地元の新聞の両方に載せられた。例えばコナント社では1831年にサバナの新聞に広告を載せ、その新しい店舗では「在庫は以前よりも多く、外套の形、つくり、材質は大幅に改善され、前のシーズンとほぼ同じ低価格で販売される。特にここの在庫は南部・西部市場に質とスタイルが適応している」と広告した。このような既製服業者の広告の多くは、最新のスタイル、価格の安さ、材質のよさ、寛大な信用供与を強調した⁷⁹⁾。

19世紀半ばには既に多種類の既製服が南部・西部に販売されていた。例えば、ハンフォード社では毎年2回ニューヨークを訪問する南部・西部の商人のためにカタログを配布していた。その1849年の春カタログには30ページにわたって既製服が掲載されており、同時期に販売されていた既製服の種類豊富さが確認できる。例えばクロス・コートでは、等級は4段階あり、

⁷⁷⁾Feldman, *Fit for Men*, pp. 80-81; *Harper's Weekly*, Vol. 1, June 27, 1857.

⁷⁸⁾Edgar W. Martin, *The Standard of Living in 1860*, Chicago, 1942, p. 192. また既製服の価格は、従来の布地を買い入れてから自家生産する方法よりも安価であったという指摘もある。Stott, *Metropolis*, p. 38.

⁷⁹⁾Feldman, *Fit for Men*, pp. 12-13.

⁷⁵⁾Feldman, *Fit for Men*, p. 86.

⁷⁶⁾Feldman, *Fit for Men*, pp. 82-83.

色はオリーブ、茶色、青、黒、とび色などがあった。形についてはドレス、フロック、サック、ハーフ・サックなどがあった。他にも織物産業の発展を反映した6つのカテゴリーがあった。ジャケットにはモンキー、パブーンなどの種類があった。ズボンにも多くの等級と色があり、薄手のズボンだけでも22種類あった。カタログには他にもベスト、ボザム・シャツ、フランネル・シャツ、厚手の綿シャツ、オーバーオール、ズロース、少年用の既製服などが掲載されており、それぞれ多種類の色と素材があった⁸⁰⁾。同年のハンツ・マーチャンツ・マガジンによると、このハンフォード社の既製服は「すべての市場で最も貧しい労働者から最もファッショナブル紳士まで適応する」ものであった⁸¹⁾。またデブリン社では注文生産部門と既製服部門の両方を持っていたこともあり、ここで扱われる衣服は、市民と旅行者、父親とその息子、商人と職人、ニューイングランド人と南部人、クエーカーとダンディというあらゆるスタイルと場所に適応するものであった⁸²⁾。

ニューヨークにおいても販売される既製服は当初は粗悪なものであったが、1830年代に入ると質のよい既製服も販売され始めた。上質の既製服は当初仕立職人に注文生産を依頼するには収入が不足している中間層のためのものであったが、やがて上層階級や労働者階級にまで販売されるようになった。労働者は仕事中白いシャツにエプロンという作業に必要な服装をしていたが、通常仕事着の他に1、2着のスーツを所有していた。パウリー通りには独身の労働者の間にB'hoyという独特の服装が流行していたが、一般の労働者はこのよう服装はしておらず、上層や中間層とほぼ同ような服装をするように

なっていた。服装に関しては従来のロング・コートに代わり1850年代には短い丈の背広が定着した。これらの結果、ニューヨークにおいては従来のような職業や階級による服装の差異は消滅した⁸³⁾。

同時期における既製服の普及は、19世紀半ばの外国からの旅行者には奇妙なことと思われた⁸⁴⁾。例えば、1852年にハンガリーの政治家のフランシス・バルツキーはニューヨークを訪問し「東ヨーロッパでは、古い国の様々な職業や階層を示す特色のある服装により、外国人はすぐに強い印象を受けるのだが、ここには社会の階層によって異なる服装というものがない」と嘆いていた。またイギリス商人のW. E. バクスターは1853-54年に「列車の中や蒸気船の甲板で、あたかも舞踏会に行くかのような上品な高級黒ラシャ服や白いチョッキで着飾ったり男に出会ったり、最も卑しい仕事をしながらも体裁のよい黒服を身にまとっている普通の労働者をみかけたりする…農民が粗末な服を着用している唯一の階級である⁸⁵⁾。…服装は見かけではなく使い道によって選ぶべきであり、着古した高級黒ラシャ服はあらゆる衣服の中でいちばんみすばらしいものであり、財産や職業にふさわしくない服を着用するのは上品な行為ではないことを、この国民はまだ知らないのだ」と述べ

⁸³⁾Pope, *Industry*, pp. 2-3; ウィレンツ『民衆支配』, 149頁; Stott, *Metropolis*, pp. 175-176; Feldman, *Fit for Men*, p. 76; Stuart M. Blumin, *The Emergence of the Middle Class: Social Experience in the American City, 1790-1900*, New York and Cambridge, 1989, pp. 141-144; Cobrin, *Men's*, pp. 27-28.

⁸⁴⁾既製服生産は、19世紀前半のイギリスやフランスでも行われていた。しかし、この2カ国では既製服はアメリカほど普及しなかった。アメリカで既製服が他の国よりも普及した要因のひとつとして、ある階級の服装を他の階級が真似してはいけないという社会的な障壁が存在していなかったことがある。Feldman, *Fit for Men*, pp. 75-76.

⁸⁵⁾農民は主に労働に必要なシャツなどを既製服で購入し、他の衣服は自家生産していたようである。またスーツは依然として所有していなかったようである。Martin, *Standard of Living*, pp. 196-197.

⁸⁰⁾Kidwell and Christman, *Suiting Everyone*, pp. 61, 63.

⁸¹⁾Hunt's, Vol. 20, 1849, p. 348.

⁸²⁾Freedley, *Leading Pursuit*, p. 134.

た⁸⁶⁾。

以上のように、1820年代に生産が開始された既製服は19世紀半ばには全国市場に向けて販売されていた。この一方で南北戦争の直前でも衣服の注文生産や自家生産は続き⁸⁷⁾、衣服全体に占める古着の割合も高かった⁸⁸⁾。しかし、既製服は生産の開始から衣服生産に占める割合を確実に増加させていった⁸⁹⁾。このことから、19世紀前半には衣服が標準化された既製服として生産され全国的な大衆消費市場に向けて販売されていたことが確認された。

おわりに

最後に本稿で確認した19世紀前半の既製服産業の発展過程を再び簡単にまとめ、同時期のアメリカにおいて衣服産業の発展という事実がいかなる意味を持っていたかについて確認したい。

既製服生産が開始される以前のアメリカにおける衣服生産は、自家生産か仕立職人による注文生産によって行われていた。本格的な既製服生産は1820年代に始まり、南北戦争の直前まで拡大を続けた。この時期に既製服生産が拡大した要因としては、産業革命の進展により、既製服の素材としての織物の価格が低下し、大量供給されるようになったことや国内商業が拡大す

る中で既製服への需要が増大したことが重要であった。特にニューヨークは、織物の入手が容易であったことや大量の安価な移民労働力を利用できたことから既製服生産の中心地となった。

既製服生産は前貸し制度を用いて行われた。これは分業化を押し進め、豊富な移民労働力を利用するという労働集約的なやり方であった。またこれは同時期に機械を導入して工場生産を行っていた繊維産業や「アメリカ的生産方式」を用いていた兵器産業とは異なったやり方であったが、衣服産業では従来の注文生産と自家生産という段階を脱して既に工業化が始まっていたことが確認された。

生産された既製服は、19世紀の半ばまでには既に全国市場に向けて販売されていた。販売される既製服は当初は奴隷や農民などのための安物を中心であったが、やがて上質なものも販売されるようになった。価格は注文生産するよりもはるかに安価になった。自家生産や注文生産は依然として続いていたが、少なくともニューヨークでは以前の階級や職業による服装の差異がなくなるまで既製服の普及が進んでいた。そして、このことは当時のアメリカのひとつの特徴となった。

このアメリカ最大の既製服生産地としてのニューヨークの事例は、他の都市の既製服産業とほぼ共通するものであり、同時期の衣服産業の発展過程のひとつの典型例といえる。このために衣服産業では、同時期に発展をみせていた繊維産業や兵器産業などとは生産工程は異なるが、既に前貸し制度を用いて生産拡大が行われており、生産される製品も既製服という標準化された製品として全国的な大衆消費市場に向けて販売されるというアメリカ的な特徴を持っていたことが確認された。

既製服産業は19世紀後半にも発展を続けた。既製服産業においては、1850年代にミシンをは

⁸⁶⁾ ダニエル・J・ブラスティン、新川健三郎訳、『アメリカ人—大量消費社会の生活と文化』上、河出書房新社、1976年、111-112頁。

⁸⁷⁾ 1860年の時点でも、富裕層は仕立職人に注文生産を依頼し続け、また幾つかの地域では、依然として自家生産が多く続いていた。Martin, *Standard of Living*, pp. 191-192, 205-206.

⁸⁸⁾ 南北戦争以前では古着の販売の方が既製服の販売よりも重要であった。古着は、ニューヨークから南部・西部に大量に販売されており、その販売の経験と知識は既製服産業に引き継がれていった。Pope, *Industry*, pp. 6-8.

⁸⁹⁾ 1860年の時点で、ニューヨークでの既製服の生産額は衣服全体の少なくとも20%には達していたと推定されている。Pope, *Industry*, p. 44. しかし、1860年のアメリカ全体の衣服生産額が7,300万ドルであり、1857年には既製服の生産額がすでに3,000ドルから4,000ドルに達していたことを考慮すると、既製服の生産額が占める割合はこれよりも高かったと思われる。

じめとした機械が導入され工場制度への移行が始まった。この一方でミシンが外部労働者の自宅にも持ち込まれ前貸し制度は依然として存続していた。また工場制度に移行した場合も生産工程は依然として労働集約的であった。このために19世紀前半とその後の時期のやり方に連続性がある。生産される衣服の中に占める既製服の割合も増加し⁹⁰⁾、1900年時点でアメリカ人の

9割以上が既製服を着用するようになった⁹¹⁾。これは19世紀後半に他の産業において大量生産が本格化する中で衣服産業においても大量生産が行われていたことを意味する。19世紀前半に関してみれば、同時期のアメリカでは標準化された製品の生産と大衆消費市場への販売という意味でアメリカ的な特徴を持つ既製服産業が衣服産業において既に現れていたといえる。

⁹⁰⁾1900年の時点で、既製服の生産高は注文生産された衣服の2倍以上となった。U.S. Census Office, *Twelfth Census, 1900, Manufactures*, Pt. 1, Washington, D. C., GPO, 1902, pp. 22, 50.

⁹¹⁾ブラスティン『アメリカ人』, 120頁。